

下顎7例であった。初診時の症状は、腫脹8例、疼痛7例、知覚障害5例であった。放射線学的には皮質骨の菲薄化を伴った顎骨内部の膨隆が認められたものは4例、広範で虫喰い状の顎骨破壊像は5例に認められた。病理組織学的診断は、扁平上皮癌が8例、癌肉腫が1例であり、口腔粘膜に見られる扁平上皮癌は5例、やや性格の異なる扁平上皮癌は4例であった。病理学的に歯源性上皮の性格をもつもの、放射線学的に皮質骨の菲薄化をともなった顎骨内部の膨隆が見られるものは、顎骨中心性癌であろうと考えられた。

3) 口腔癌に対する neo-adjuvant chemotherapy の検討

—CDDP 投与例について—

星名 秀行・大平 敦郎
鶴巻 浩・坂井 広也
森 勝・本岡 悟
森山万紀子・藤田 一
大橋 靖
(新潟大学歯学部
口腔外科学第二
教室)

口腔癌に対する CDDP neo-adjuvant chemotherapy について、臨床病理学的に検討し報告した。対象は昭和62年7月から平成3年6月までに治療した口腔扁平上皮癌1次症例17例(50歳から70歳)である。原発部位：下顎歯肉7例、舌5例、上顎歯肉2例、頬粘膜、口底、口咽頭各1例。病期：Ⅲ期7例、Ⅳ期10例、CDDPの投与法は 50 mg/m² を点滴静注 (PEP と併用14例、CDDP 単独3例) し、その後、手術 (12例)、放射線治療 (5例) を施行した。結果：臨床1次効果は PR・8例、NC・9例、奏効率 47.1% であった。手術群12例の病理組織学的効果 (大星ら) は IVB・1例、IIB・4例、IIA・7例であった。PR 群は組織学的にも効果が認められたのに対し、NC 群では組織学的にも効果を認めず、これらは初診時生検像で高度悪性癌であった。PR 群では再発、腫瘍死1例のみに対し、NC 群では再発4例、遠隔転移1例で、現在、胆癌生存2例、腫瘍死2例であり、全例の3年累積生存率は 77.4% であった。

4) 早期肺癌の外科治療成績

小池 輝明・寺島 雅範
滝沢 恒世
(新潟県立がんセンター
新潟病院胸部
外科)
栗田 雄三・木滑 孝一
横山 晶
(同 内科)

1990年末までに切除した肺門部早期肺癌64例と、肺

末梢部早期肺癌88例の計 152 例の外科治療成績について検討した。肺門部早期肺癌は男性62例、女性2例、肺末梢部早期肺癌は男性56例、女性32例であった。

結果：① 組織型は肺門部早期肺癌では Sq:62, Ad:2, 肺末梢部早期肺癌では Ad:71, Sq:12, La:1, Sm:1, Ad-Sq:1, Carcinoid:1 であった。② 肺門部早期肺癌術後の死亡例は17例で、手術関連死1例を除く16例中9例では術後喀痰細胞診または気管支鏡検査にて腫瘍細胞が検出された。肺末梢部早期肺癌術後死亡例は10例で、肺癌再発または転移4例を含め腫瘍関連死を6例に認めた。③ 肺門部早期肺癌の3生率86.4%, 5生率76.5%, 10生率63.5% であり、肺末梢部早期肺癌の3生率96.1%, 5生率85.7%, 10生率81.6% であった。

5) ¹⁹²Iridium thin wire による気管支腔内照射の試み

斎藤 真理・樋口 健史 (県立がんセンター
新潟病院放射線科)
栗田 雄三・木滑 孝一
横山 晶 (同 内科)

肺癌の集団検診に喀痰細胞診が行なわれるようになり、胸部X線写真無所見で、気管支鏡上ごく早期と思われる所見を呈する肺門型肺癌が発見されることが多くなってきた。このような症例の治療は手術が 1st choice とされるが、呼吸機能が悪く手術の適応外とされる症例も多い。そういった症例には放射線の外照射が行なわれてきたが、外照射では手術例に比し再発例が多くみられる傾向があることから、再発例を減らすこと、呼吸機能を温存することを目的に、不破らの方法を追試する形で ¹⁹²Iridium thin wire を用いた気管支腔内照射を91年9月より開始した。胸部X線写真無所見で気管支鏡上所見があり、扁平上皮癌の確診がえられ、低肺機能、重篤疾患の合併などで手術の適応外とされた症例を第一の適応と考え、外照射 40 Gy/20f および腔内照射 5 Gy/5f を基準線量として照射を試行中である。現在までに12例の登録があり、11例が照射終了、1例が照射施行中である。